

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 30 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370095

研究課題名(和文) グローバル・アート・インダストリーにおけるアートの可能性

研究課題名(英文) the possibility of art in the age of global art industry

研究代表者

前川 修 (Maekawa, Osamu)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：20300254

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：メディア/バイオ/スペース・アートの三つの側面からグローバル・アートにおけるアートの可能性を検討した。初年度は脳科学とメディア・アートについて専門家を招いて意見交換を行い、次年度にはバイオアートの専門家とアーティストを招いて意見交換を行い、またアーティスト下道基行を招いた講演でグローバル化におけるアートの現在を議論し、最終年度にはメディア研究者/アーティストであるクリス・サルターを交えて意見交換を行うとともに、宇宙での人の身体変容について心理学者を招いて議論をした。同時に、19世紀から20世紀にかけての言説整理を行うことで、それぞれのアートの局面と理論研究との交差点を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： We examined the possibilities of art in the age of globalization by approaching three aspects of art (media / bio / space art). In the first year, we exchanged opinions with experts on brain science and media art (Mori and Seiyama), in the second year, with experts on bio art and artists (Iwasaki, Saito, Shitamichi), in the third year with a media artist/researcher (Salter) and a psychologist/space life scientist (Koga). At the same time, we organized the discourses (about the relation of art and body/machine/affect) from the 19th century to the end of the 20th century examined some theoretical frameworks for thinking the current arts.

研究分野：芸術学、美学

キーワード：グローバル・アート メディア・アート バイオ・アート スペース・アート

1. 研究開始当初の背景

二〇世紀末以降、グローバリゼーションの進展のもとで、さまざまな文化領域の存在様態が変性している。アートにおいてもその事態は同様である。しかし従来、生産の次元、流通受容の次元、反省的次元の変容が、相互に結びつけて総合的に考えられる機会はそれほどなかった。こうしたアート、つまりグローバル・アートのこれまでの言説は、モダニズム芸術、それを語るための芸術の「普遍性(ユニヴァーサルイズム)」を基礎にしており、この「普遍性」が(その対極である特殊性や地域性ととともに)もはやグローバリズムという、別の確たる中心もなく脱文脈化しつつける「普遍性」によって掘り崩されつつある現状をうまく捉えられていなかった。

こうした、アートの生産・流通・受容の各側面で根底から生じているイメージ全般を含む現在の流動的状況を指し示すために、ひとまず「グローバル・アート・インダストリー」という語を本研究では使い、「技術」と「芸術」双方にまたがるアートという概念を再考し、同様に従来の「芸術」概念を再編集し、その結果、先に述べた二種の「普遍性」とは異なる、しかもアートの内実を再考するための理論研究/事例研究の磁場を可能性として示す必要があると思われる。

本研究で焦点化するアートは、現代アートのなかでも、「メディアアート」、「バイオアート」、「スペースアート」の三つである。これらのアートは、グローバリズムにおける政治的経済的運動の必要不可欠な要素であるテクノロジーを仲介にしつつ、その作用を時に堰き止めて反省の素材として用い、なおかつ従来の美学・美術史の必須の枠組みであった形式と内容、時間と空間、あるいは生命と非生命、中心と周縁などの二項対立を無効にしようとするような力動を有しているアートである。この三種類のアートのこれまでの学術的背景と本研究との関係も簡単に述べておく。メディア・アートについては、すでにその歴史的研究は、国内外で比較的多くの研究書が著されているし、一九九〇年代以降に登場した、身体や情動という概念から理論的探究を展開する研究もいくつかあるが、個別の作家および作品を中心にした研究が依然として主であり、何よりも世紀転換期を経て、グローバリズムの加速化する現在の文脈にメディアアートを置き、その可能性を探求した考察は国内外でもほとんどわずかしかが見られない。また、バイオアートについては、その概念の定義をはじめ、バイオ・アーティストたちの各世代間の系譜、そして私たちの身体とテクノロジーの関係にそれがどのような反省的次元をもたらすかという問題、さらには「生命というメディア」を使用するアートが持つ他のアートとの関係については、とくに国内において理論的作業は進んでいない。そ

してスペースアートという語は、本研究のために設定した新たな概念であり、その起点としては、昨今の国際宇宙ステーション等で実施されている、宇宙という微小重力空間でのアート実験のことを考えている。重力や奥行きや方向性を欠き、身体への刺激が切り詰められ、知覚・情動・行動が根本的に更新される宇宙空間をメディウムとした実践であると言い換えてもよい。人間という生命体をその培地=メディウムにした実践が、芸術理論や美学理論のなかにもどのような影響を引き起こすのか、これも依然としていくつかの事例報告しか蓄積されていない。以上の三種類のアートは、たとえば形ならざる形としてのアート(バイオアート)、地上的時空間の失調としてのアート(スペースアート)、その収斂点としての身体とメディア装置との融食としてのアート(メディアアート)など、アートが帯びつつある新たな境界を示しており、比較対照させながら考察することもできる。さらにはそれが、モダニズム芸術における普遍性ともグローバリズムにおける普遍性とも異なる、別の意味で普遍的、ないし脱境界的現象を理論的に捉える基礎となると思われる。

ただし他方で、こうした新たなアートを「新たなもの」としてカテゴライズし、単線的芸術の系譜の先端に位置づける言説には十分な注意が必要であることにも本研究は自覚的である。そのために、本研究は考古学的、系譜学的研究というアスペクトも補う予定である。つまり、一九世紀半ばから二〇世紀後半にいたるまでの、映画や写真なども包含する広範な意味でのアートにおける映像メディアの実践、バイオアートの実践、時空間の圧縮や変換を試みたアート実践を参照点にしつつ、それらが現在のアートとどのような接続点や断絶点をもつのかの検討の必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバリゼーションの進展のなかで、あるいは中心なきドラステックな経済的運動の力学のなかで、生産・流通・受容すべての側面において環境の変容を被ったとされるアートのもつ現状と可能性を美学的観点から分析するというものである。つまり、モダニズム/ポストモダニズムという対立以降におけるアートの言説の変異を理論的に捉えなおし、同時に、新たなアートとして世界各地で展開しているいくつかの種類のアートを参照事例として調査研究をおこない、さらに、一九世紀以降のアートがかつて帯びていた可能性を考古学的、系譜学的に検証しなおすことで、理論研究、事例研究、現在と過去をつなぐ考古学的研究の三点を並行的に進め、それらの視点を統合する基礎的な地平を呈

示することを目指している。

3. 研究の方法

本研究は、三名の研究者で行われる。この三名が互いに担当を重ねあいながら次の三つの領域を担当する。第一に、これまでの文献における理論言説を分析すること（理論研究）第二に、現在のアート実践を実地調査するとともに、その制作者にインタビューなどの聞き取り調査を行うということ（事例研究）第三に、これまでの理論研究と事例研究をもとに、それを統合整理し、さらに基礎的地平を構築すること（研究統合）の三つである。第一の理論研究には文献資料の収集と精査が含まれ、第二の事例研究には、国内外の各機関の視察および制作者へのインタビュー、メールでの聞き取りが含まれる。毎年1回は制作者や実践者を招いた意見交換会を行う予定である。また、以上の大きな研究会に加えて、その準備や進展の確認を含めた小規模の研究会も定期的に行う。

4. 研究成果

初年度は、グローバル・アートをめぐる言説収集と分析を行った。とくにハンス・ベルティンク『イメージ人類学』以降のグローバル・アート言説を批判的に検討し、同時にW・J・T・ミッチェル「ピクトリアル・ターン」以降の言説も定期的な会合を開いて検討した（その成果が前川「写真イメージの人類学：ベルティンクの写真論」（『立命館言語文化研究』27（4）））。

また脳科学とメディ・アートについて専門家を招き、「感性計測技法 アートの現在と未来」という研究会を行い、現在の脳科学の現状とそれを参照するメディアアーティストの実践について意見交換や議論を行った。結果として明らかになったのは、脳科学と連関するメディアアート/バイオアートが従来の狭い意味でのモダニズム・アートを踏み越える圏域を形成しつつあること、ただし、その広がりを批判的に検討する枠組みを提起する必要であった。

さらに、現在のイメージの際限なき流動のなかで写真イメージをいかに批判的に考察しなす枠組みがありうるかについて、研究代表者が表象文化論学会および京都国際現代芸術祭においてアラン・セクーラをめぐるシンポジウムで報告をおこなった（その成果は京都国際現代芸術祭のカタログに掲載）。

次年度は、第一にメディアアート言説の検証をおこなうべく、デジタル写真を例に諸言説や諸理論の集積と検討をおこない、その成果を美学会西部会研究発表会においておこなった（その成果が前川「デジタル写真の現在」『美学芸術学論集』12号）。現在のデジタル化されたイメージの言説が根底から別の理論的ベースを要請しており、その力学に十分に対応できていない状況、それを批判的に

検討する視座を提示した。

また、グローバル・アートの時代においてそれに抗するヴァナキュラーなアート実践を試みるアーティストを招き、対論を行った（下道基行）。グローバリゼーションの進展の下で澱のように沈殿する素材を蒐集しながら作品化する実践を、現在の均質な言説空間および実践空間にいくつもの孔をうがつ試みとして考察を行った。

さらに定例の研究会として、バイオアートの研究者でもあり、実践者でもある岩崎秀雄とアーティストの齋藤帆奈を招き、「生命操作の技法=アート その現在と未来 生物学/バイオアート」というタイトルで研究会を行った。歴史的にはまだ浅いバイオアートの系譜をまとめるとともに、生命工学がアートにひろがる際のいくつかの問題点を提起し、意見交換を行った。生命操作、生命工学においてもグローバリゼーションの力学を確認できるが、そこにどのような拮抗的可能性を見いだせるか、その出発点となる考察を見いだした。

なお、研究分担者の岩城は国際学会において「グローバル化時代における美学・芸術学の課題 感性論・視覚文化論・メディア論の観点から」、研究分担者の増田は「生命科学をめぐるメディア論的考察 バイオアートを事例として」という発表を行い、それぞれ定例の研究会と重なり合う研究成果を報告した。

最終年度には、定例の研究会としてメディアアーティストでもあり研究者でもあるクリス・サルターを招き、「感性編集技術=アートの現在と未来 感性人類学/メディアアート」と題した講演会を行い、最先端の研究者=実践者から人間の感性を工学的に編集することを人文的にいかに哲学的、人類学的に考察するべきか意見交換をおこなった。

また、宇宙開発においてヒトの身体の順応について長年研究を進めてきた古賀一男を招き、「微小重力環境へのヒトの順応とその限界」と題する講演を行い、同時に美学芸術側からは分担者岩城が「スペースアートとエステティックス」と題した導入的な報告を行った。宇宙をめぐる生理学的、心理学的実験がわたしたちの感覚の変容をどのように検討してきたのか、逆にアートの実践や映像実践がいかに宇宙空間を視覚化してきたのか、両者の視点を掛け合わせることでスペースアートが帯びた反省的契機をいくつか取り出すことができた。

また、分担者岩城は論文 Cinema as Image Generation Systems: Bergson and the Cinematographical Mechanism of Perceptionのほか、発表 Bodily Experience and Life in a Microgravity Environment: Thinking with Space Art を国際美学会で、分担者増田は、Gravity and Moving Image in the Nineteenth

Century を国際美学会において発表し、さらには『科学者の網膜』(青弓社)を刊行した。こうした成果は、本科研での議論の成果でもあり、スペースアートをめぐる言説の次元を紹介し、その考察をひろく促す機会になり、同時にまた 19 世紀以来の科学的映像の系譜学を着実に検証し直す機会も提供した。なお、研究代表者前川と分担者増田は長谷正人編『映像文化の社会学』(有斐閣)にも執筆を行い、現在に流布する映像への欲望をめぐる言説の整理を行った。

以上、3 力年に渡る研究によって、一方でグローバル・アートをめぐる考古学的・系譜学的な検討を行い、現在焦点となる議論の骨格を検証し、さらに批判展開すべき次元を提起し、他方で、各分野の代表的研究者との意見交換を通じて事例の検討から生じてくるそれぞれの磁場を抽出し、理論的フレームを検討し、さらには理論的・言説的次元と実践的次元を交錯させ、統一的に議論する場を構築し、そのプラットフォームをもとに当初に予定していた成果を十分に生み出すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

前川修、写真を逆なでする セクーラ (1951-2013) の写真理論 / 写真実践、PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭、査読無、2015、147-150 頁

前川修、デジタル写真の現在、『美学芸術学論集』12 号、査読有、2016、6-33 頁

岩城覚久、Cinema as Image Generation System: Bergson and the Cinematographic Mechanism of Perception, 『文化・芸術・文学 近畿大学文芸学部論集』28 (1)、査読有、2016、pp.1-22

[学会発表](計 9 件)

前川修、イメージ人類学の写真論、立命館大学国際言語研究所主催シンポジウム、2015.3.16、立命館大学(京都府京都市)

岩城覚久、グローバル化時代における美学・芸術学の課題 感性論、視覚文化論、メディア論の観点から、暨南大学国際学術研究会、2015.12.26、広州市(中国)

増田展大、生命科学をめぐるメディア論的考察 ―バイオアートを事例として、美学会全国大会、2015.10.11、早稲田大学(東京都新宿区)

増田展大、Gravity and Moving Image in the Nineteenth Century, 20th International Congress of Aesthetics, 2016.7.28, Seoul National University (Seoul, Korea)

岩城覚久、Bodily Experience and Life in a Microgravity Environment: Thinking with

Space Art, 20th International Congress of Aesthetics, 2016.7.28, Seoul National University (Seoul, Korea)

[図書](計 5 件)

IWAKI Akihisa, Ewa Chudoba and Krystyna Wilkoszewska eds, Naturalizing Aesthetics, Wydawnictwo Libron-Flip Lohner, 2015, 180(167-177)

増田展大、科学者の網膜、青弓社、2016、総ページ数 336

増田展大、映像文化の社会学、有斐閣、2016、302(249-267)

前川修、映像文化の社会学、有斐閣、2016、302(233-248)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前川 修 (MAEKAWA Osamu)
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号：20300254

(2) 研究分担者

岩城 覚久 (IWAKI Akihisa)
近畿大学・文芸学部・講師
研究者番号：60725076

(3) 研究分担者

増田 展大 (MASUDA Nobuhiro)
立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師
研究者番号：70726364